
涙雨

030130

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

涙雨

【コード】

N2352C

【作者名】

030130

【あらすじ】

遠い街に住む人々。彼らと生きる女性、クロ。それぞれが抱いた傷。その痛みを拭うように、今日も雨は降る。

窓の向こうで雨が降っている。

一日中日に照らされ、すっかり火照った街にはこの上ない恵みだが、しかし私にとっては耳障りなだけだ。

ふらりとこの街にやってきて、引きこもっている。誰にも逢わないし、誰とも話さない。それがなんとも心地よく、私はすっかりこの生活を愛してしまっていた。

包装のビニールを剥いて、フィルターを啜えて火をつける。

吐き出した煙が湿気でよどむ。

インターホンが鳴った。私は放っておく。そうすれば、彼女はそ
のうち勝手に入ってくるはずだ。

ドアノブが回って、黒づくめの女性が入ってきた。デニムのジーンズと半袖のシャツ。傘を閉じて玄関に立てかけると、ハイヒールを脱いで部屋に上がった。彼女は軽く会釈をしながら、窓際へ進み座った。

私は部屋のほぼ反対側で静かに煙草を吸っていた。六畳ほどの部屋。お互いの名前も知らない二人が取るには標準の距離だ。

私は彼女にあだ名をつけている。いつでも真っ黒だからクロ。絶対に間違えることのない、絶妙のネーミング。

「今日は」

クロが口を開いた。目をやると雨を見つめている。

クロはこんな感じで、定期的に私の元を訪れては独り言のように経験してきた話をしてくれる。表に出ない私は、ピアノのような美しい声で紡がれる物語を聞くのを、ひそかな楽しみにしていた。

「では、これで失礼します」

「ちょっと待て、結局私はどうすればいい？」

彼女は無言で立ち上がると、無駄のない動きで玄関へ進み、会釈

を落として部屋を出て行った。

私は煙に溜息を寄せ、机に向かった。最近ではアナログで原稿を書く人間もすっかり減ったようだが、個人のスタイルは流行り廃りで動じるものではない。

だが、心理状態は動じるものだ。

彼女は私に眠くなるほど長い話をしてくれた後、「いまのままでいいのか」と訊ねてきた。その余りに漠然とした問いに、私は冒頭の切り替えしをすることで手一杯だった。

私はペンを置き、煙草を新調する。

彼女の眼差しが、私の心を射抜いてしまっていた。そのせいで、その気になれば流せた言葉が胸に引っかかったままだ。このままでは、明日の締め切りに間に合わないかもしれない。

それは困る。誰が困るのか、と言われれば、私、と答えるしかない。

自分で言うのも情けないが、私はいわゆる「売れない小説家」だ。幼少時代の淡い恋や妄想を引っ張り出しては、見栄え良く三百枚ほどの原稿用紙に写す。そんなことを始めて、もう十年になる。もちろんこちらでも商売だから、そのまま転載するわけではなく、いくらかのエッセンスやアクセントを加えて、なんとかエンターテインメントに昇華させる。しかし市場もバカじゃない。ありふれた私の思いは、そして力のない私の文章力は簡単に見抜かれ、本棚の肥やしに成り下がった。

いまのままでいいのか。彼女はそう言った。

私は机の引き出しを開けた。そこには、輪ゴムでまとめられた官製はがきや封筒がちんまりと座っていた。

捨てる神あれば拾う神あり。こんな私にも僅かだけれどファンがいる。新作を出すたびに感想を送ってくれる人もいれば、涙の滲んだ便箋を送ってくれる人もいる。とてもありがたいことだ。

今、小説家の私を突き動かしているのは、彼らに対する恩赦。それだけだ。私の作品を待っていてくれる人がいる。その人たちに私

の創った物語を送る。それこそが、自分の生き甲斐とすら思える。
このままでいい。それが私にはお似合いなのだ。
「違う」

私は火種を消した。

綺麗事だ。その証拠に、欲は捨てきれていない。できることなら
印税生活というヤツを送ってみたいし、メディアやマスコミにちや
ほやされてみたい。こう見えても、喋りにはそれなりに自信がある。
チャンスさえあれば、のし上がれるはずだ。間違いない。

駄目だ。あれこれ考えてしまい、頭の中になんの情景も浮かんで
こない。こうなると、もうしばらく筆は進まない。

私は引き出しを閉め、腰を上げた。煙草をポケットに押し込み、
ニットの帽子を被る。

こういうときは散歩に限る。気分の調節もできないようでは、こ
の仕事はやっていけない。

この街は狭い。目的もなくふらふらしていても、すぐに観たこと
のある景色に出会う。

すっかり慣れてしまったところへ出た。街を縦断する大きな川、
その防波堤に腰を降ろし、自販機で買った缶コーヒーを開ける。

ほのかな甘みとかすかな香りが鼻を抜ける。溜息のような深呼吸
を落とし、私は世界を見回した。

細かくなつた雲の合間から、憎たらしい太陽がこちらを覗いてい
る。川辺では子供たちが暴れるように遊んでいた。向かいにはずい
ぶん古くなった三階建てのアパートが退屈そうに並んでいる。

二口目でコーヒーを飲み干すと、煙草を取り出して火をつけた。
届くはずもないのに、子供たちから顔を背けて煙を吐く。

私があのからの年齢の時は、それこそ本の虫だった。休み時間
のたびに図書室に足を運び、ほとんど毎日抱えきれないほどの本を
持って帰り、睡魔に負けるまで読み耽っていた。物語に出てくる女
性に恋をしたりした。一緒に旅をしたり、同じ苦悩を抱えたりもし

た。目を覆いたくなるような惨劇に涙を零した日もあった。

それはこの上なく幸せな時間だった。何より、あの子供たちのようにあまり友達と騒ぐ、というのが好きでなかった。そして、あの子供たちのように、泣いた子供をあやしたりフォローしたり、他人に気を遣うのが嫌だった。そんな私にとって、本は唯一の話し相手だった。

灰を缶に落とす。

そう考えると、私は小説家になるべくしてなったのかも知れない。それが歓迎されたり賞賛されたりすることかどうかはわからない。でもそれだけは、きつと間違いない。

煙を吐く。胸を満たし、詰まっていたものをすくって鼻を抜けて霧散する。

いいのだろうか。運命という綺麗な言葉を使ってしまつて構わないだろうか。消去法で選んだこの仕事を、天職だと胸を張つてしまつて構わないだろうか。

「あなたたち！」

隣で突然大声がした。まったく気が付かなかったが、セーラー服を着た気の強そうな女の子が仁王立ちしていた。小振りな胸の前で組まれた腕には、近くのスーパールのビニール袋がぶら下がっている。「いつまで遊んでるの！お風呂の準備終わったの？」

尚も辺りに響く怒号。いささか声が大きすぎるのでは、と思つたが、辺りには私と彼女、そして子供たちしかない。

子供たちは防波堤を斜めに駆け上がり、向こうへ行つてしまふ。あちらに家があるのだろう。きつと大慌てでお風呂の準備をするに違いない。

「ふう」

彼女は大げさに息を吐くと、膝を折つて私に視線を合わせた。そして苦笑いを浮かべたまま、ちよこんと頭を垂れた。

「すいません、大声出しちゃって」

「いや、全然」

素直な気持ちだ。中々に微笑ましい光景を見させてもらった。むしろこちらがありがとうと言いたいくらいだった。

なのに彼女は、スーパーの袋から小さなリングを取り出すと、目が線になるくらいに微笑んで私にそれを差し出した。

「つまらない物ですけど、どうか受け取ってください」

少し戸惑ったが、受け取ることにした。受け取って、自分が啜え煙草をしていることに気が付いた。私はなるべくスムーズに煙草を缶に放り込んだ。

今時珍しいくらいに優しい女の子だ。多分、花も恥らう女子高生、というやつだろう。日頃私がイメージしているそれとは大分離れているけれど。

もちろん、不思議ではあった。彼女は私のことなんか歯牙にもかけず、私の後ろを通り抜けて弟たちを追いかけることだってできたはずだ。何故、ぼうつとしていただけの私に声を掛け、且つ気を遣うのか、理解できなかった。

そんなことを考えているうちに、彼女は腰を降ろしてしまった。

「今日は休憩ですか？」

「え？」

まさかこんな展開になるとは思っても見なかった。すつくと立ち上がって「じゃ、お邪魔しました」とか気の効いた言葉を置いて、弟たちを追いかけ行ってしまえばかり思っていたのに、変わらない笑みで話しかけられるなんて。

「え、ええ、まあ」

口から出た言葉は、そんな曖昧なものだった。

「よかった」

彼女は笑みを強めると、ころん、と首をかしげた。

「イメージ通りの人でした」

「え？君は・・・？」

「元宮つぐみです」

私は思わず、口を開いたまま立ち上がってしまった。

元宮つぐみ。数年前から新作を出すたびにファンレターを送って
くれている人だった。

アパートの一室が点灯した。「あそこがアタシたちの部屋です」
と元宮さんは教えてくれた。

彼女はあの部屋から、時々今日みたいに川を眺めてぼうつとして
いる私を見つけたそうだ。そしてそのシルエットで、自分の好きな
本の最後、表紙の折り返しに小さく写っていた私だと気が付き、以
来しばしば私のことを遠くから見えてくれたらしい。

元宮さんは私の本についての感想を思い切り投げてくれた。あの
ヒロインがよかった、あの展開がよかった、などの基本的な感想は
もちろん、あの表現が素晴らしかった、と一歩踏み込んだ賛否まで
総括すると、絶賛だった。ここまで何もかも褒められたのは、デビ
ユー当初以来だった。

「私、先生の話の雰囲気が好きなんです」
ペットボトルのお茶で喉を湿らせてから、彼女は遠くを見て微笑
んだ。

「全体的にちよつと暗いじゃないですか。明るくないってくらいの
意味ですけど。そういうのが凄く、心地いいです。恋愛小説とか漫
画って、テンションをあわせなくちゃ楽しめないじゃないですか。
私のテンションって、先生の作品がちょうどいいんです」

この台詞を聞いたときの感動と言ったら無かった。小説家として
は失格かも知れないが、この感情の昂ぶりを表現する言葉を、私は
知らない。

「ありがとう。そんな風に肯定されたのは、生まれてこの方初めて
です」

「いえ、こちらこそ。先生の作品には励まされたことが何度もあり
ますから」

「女が振られ続ける話とかでも？」

「はい。本編では語られてないですけど、裏にある主人公の強さ、

ちゃんと伝わってきました」

本編で語っていないのだから、意図してはいない。無意識のうち
にそうなってしまうたか、彼女が勝手に妄想を抱いているか、ど
ちらかだ。

自分にそんな力がある、と舞い上がったたりしない。彼女以外の誰
かにそう言われた事がないからだ。彼女よりはるかに読者として優
秀な編集さんは、そんなこと一言も言ってくれなかった。

少し複雑な心境になりながらも、尚も口を止めない彼女の話を曖
昧な相槌を打っていた。

日は少しずつ沈んでいき、やがて水面が赤く染まり始めたころ、
元宮さんは短距離を走り終えた後のような深呼吸をした。

「すいません、なんだか一方的に話してしまって。先生の作品につ
いて話した事がなかったもので、つい調子に乗ってしまって」

自嘲した。確かに、出回っていない私の作品について語れるのは
著者本人くらいだろう。

彼女は私の顔色を見て、慌てて口を抑えた。

「いや、あの、違うんです！先生の作品って、私みたいな高校生が
読むのは早いつていうか、どちらかと言えば成人女性をターゲット
にしていらつしやるから・・・」

「いや、いいんです。ありがとうございます」

私は身の程を知っている。さつきまで散々愚痴っていたとおりだ。
それ以上でも以下でもない。売れない小説家は、いや、人は誰でも
分を越えたことをしたり考えてはならない。それは社会の摂理だ。

私は立ち上がると、何度も謝る元宮さんを手で制し、帰路へ着こ
うとした。

「そんな、謙遜なさらないでください！」

元宮さんは立ち上がると、歩き出していた私を追うべく走ろうと
した。

その一歩目、その足の下に、私が灰皿にしていた空き缶があった。
骨と肉が曲がる鈍い音で、私は振り返った。本宮さんの重心は、

彼女をひどく不恰好なまま河川敷に叩きつけようとしていた。

咄嗟に体が動いた。私は彼女の肩を持つと、ありったけの力で強引に道のほうへ押した。

彼女は尻餅をついて道へ着地した。私はそれを見て強く安堵した。体は河川敷を転げ落ちていく。額に激しい痛みが生まれた。

ピアノのような声は止み、代わりに無愛想な雨の音が部屋を満たしていく。

クロはこっそり息を吐いた。

「彼女、設楽凜は稀なほどのマイナス思考でした。それを見抜いていた担当の編集者は、彼女に自身の作品が売れていることを伝えなかつた。伝えることによつて、彼女の才能と能力が眠ってしまうことを恐れた。社会現象になりかけた作品を生み出した、いわば天才でしたから」

彼女の語り方があまりにも上手だから、私はセンセイのことをまるで自分の事のように感じてしまっていた。

「その後、センセイはどうなったの？」

「今も意識不明の状態で病床に臥せています」

「でも、頭打つたんだよね？目覚めた時に、ショックとかでその性格は治つて・・・ないよね」

「でしょうね」

「じゃあこれからも、センセイは自分の部屋に閉じこもつて事実を知らないまま作品を生み続けるのね。なんだか悲しい」

「ええ。生きていたら、ですけれど」

「そっか」

私は煙草を啜えた。雨は強くなる一方だ。

クロは立ち上がると、「では、またいつか」と言つて部屋を去つた。

後姿に違和感があつた。何度か見た事があるはずなのに、でも初めてのような気がした。気のせいとも既視感とも違う。心に雨雲が

生まれたようだ。

私は机に向かった。話に触発されて、久しぶりに何か書いてみようと思った。

ペンを取り出したところまでは良かったが、原稿用紙を取り出すときに誤って指先を切ってしまった。

焼けるような痛みが走ったが、血は出なかった。

「追う恋愛と追われる恋愛、どっちがいい？」

まだ学生だった頃、友人と呑んでる時に出てきた話題だ。

当時はちょうど、ストーカーって人種が社会で流行っていて、それを題材にした連続ドラマとかやっちゃってたのを覚えてる。まあ、興味がなかったから観てなかったけど。

オレは追われる方がいいな、って答えたんだ。やっぱり愛されたいし、特別扱いにも飢えてた。誰かを夢中にさせるだけの魅力があるって信じたかったし、実際その辺の野郎よりは顔もスタイルもセンスもいいはずだ。どういうわけか恋人はいなかったけど。アレだな、オレの良さに気がつく女がいなかったんだよ。

そんなことを酔った勢いもあって泣きながら友人にぶちまけた。そしたらアイツは哀れむように笑って、氷とウイスキーしか入っていなかったグラスを空にして、強めに机に置いて言った。

「どう考えても、アンタは追う側でしょ」

自慢にもならないけど、アイツは親友って呼べちゃう仲だった。性別なんか飛び越えて、本当にお互いを判り合えちゃった、唯一の人間だったんだよ。ソイツが断言しちゃったんだ。オレとしては受け入れるしかないじゃないか。

「そうかな」

「そうだよ。そうじゃないと、アンタ燃えないでしょ」

まあまあ凶星だったから、オレは黙っておかわりをグラスに注いだ。

「飽きっぽいつてか気分屋だからね、翼は。自分に振り向いた人間には興味がなくなるじゃん。そういうのは恋愛って言わないよね」

「それは違うぞ？」

オレは冷酒で喉を熱く湿らせてから反論した。

「彼女には、オレのことをずっと見ていてほしいんだよ。オレにと

って彼女ってのは、いつか戻ってくるころなんだよ。だから、早く帰って来い、とか言われると冷めるの。オレはオレで他に見たりやりたいことあるし、それを邪魔されるのは誰だって冷めるだろ？」

「自分に真面目なようにも、筋金入りのわがままにも聞こえる」

小さく笑い合っていると、店員が料理を運んできた。ちよつとドギマギしていたけれど、割と可愛い女性だった。

「そつだ。なあ、お前は追う側と追われる側、どっちがなんだよ？」

テーブルの向かいで肘を付きながら酒を飲んだ親友は、不敵な笑みで言い放った。

「アンタになら、追われてもいいかもね」

運命を信じられたのは、翼君のおかげだ。

アルバイトの最中に接客した人が、女連れだったけれどかなりタイプだった。だから私は意を決して、レシートの裏に連絡先を書いてお釣りと一緒に渡した。そしたら翌日、連絡があつて、付き合うことになった。

今まで恋人なんてできなかったことがなかった。初めての人がこれ以上ないほど運命的な出会いで、しかも絵に描いたような理想のヒト。私は強く心に誓った。この愛を不滅のものにしようと。誰もが羨むような、甘くて熱いものにしようと。

翼君はとつてもクールな人だったから、この誓いをそのまんま共有しよう、なんて言えなかった。おまけにいつだって難しい顔をして何かを考えているから、浮かれた軽い言葉を投げてそれを邪魔するのも嫌だった。ううん、そうすることで、彼に嫌われるのが嫌だったんだ。

付き合つて三ヶ月目の日曜日。この日のデートコースは山道をドライブ。本当は山の向こうにある温泉に行こうって予定だったけれど、峠のドライブインで翼君が予定を思い出して、折り返すことになった。

天気が悪かつたせいもあつて、翼君はずっと機嫌が悪かつた。ま

るで自分を、ううん、世の中の私以外の全てを恨んで憎んでいるような顔で運転していた。

雨はどんどん強くなっていった。ワイパーは最速で動かしても、まるで海底を走っているような景色だった。

豪雨が車を叩く音と、翼君が時々打つ舌の音だけが車内を占領していた。

突然目の前が明るくなった。カーブを曲がったところに、運転の下手な大型トラックが走ってきたんだ。

翼君は飛び切り強く舌を鳴らして、勢い良くハンドルを切った。私は反動で頭をガラスにぶつけた。

豪快な音がして、エアバックが開いた。ジェットコースターと同じ衝撃を感じて、車が谷底へ落ちていくのがわかった。

私は祈った。私は助からなくてもいいですから、翼君だけは、どうか助けてくださいって。私なんかどうなってもいいから、彼だけは助けてくださいって。そして、こんな私に同情してくれたら、私も助けてくださいって。

もう一度車に衝撃が走ると、私の意識は真っ暗な世界に塗りつぶされた。

足音が聞こえる。

聞こえる、ということとは、オレはまだ死んでいないらしい。それとも死んでも聴覚だけは残るのでは、という実も蓋もない発想が生まれただけで、試しに指を動かしてみたら見事に感覚があった。目を開けてみる。

観たこともない世界だった。いや、見覚えのない世界だった。流行よりちょっと古い、昭和の映画の港町みたいな景色だった。大小様々なもので作られた石畳の上で、オレはうつ伏せになって寝転んでいた。

いよいよ生きてるか怪しくなってきた。オレと由利はドライブをしていて、向かいからトラックがやや大回りに入ってきたから、

オレがそれを避けるようにハンドルを切ったら、思いのほか道が細くて、ガードレールをぶち破って谷底に落ちたんだ。だってのに、なんでこんな観たことのない街にいるんだろう。常識で考えればありえないことだ。天国にしても地獄にしても、不似合いだ。川がないから三途つてわけでもなさそうだ。

曇天の下、オレはのろのろと立ち上がった。なんと、五体満足だった。

前で誰かが動いた。家の角からひよっこりと顔を出してオレを覗いている。

「……………」

女は口元だけで笑うと、顔を引っ込めてしまった。

考える前に走っていた。何故ここにアイツがいるのか、結局ここはどこなのか。わからないことだらけで頭は混乱したままだけだったけれど、自然と口の端が釣り上がった。

とうとう翼君が動き出した。ずっと見守っていた、私の愛が届いたに違いない。必死で神様に祈った甲斐があった。

目が覚めたとき、彼はうつ伏せになったままぴくりとも動かなかった。私が大慌てで駆け寄ろうとすると、正面から黒ずくめの女の人が歩いてきた。

私は本能的にその場を離れた。そして漬物用の樽の陰に身を隠して、事の成り行きを見守った。

女は翼君の頭の前で膝を曲げると、不躰なことに彼の頭を両手で挟むように掴んで持ち上げた。そして自らの顔に近づけると、私という恋人の目の前にも関わらず、綺麗なキスをした。

そう、綺麗だった。思わず息を呑んでしまうほどに。

同時に、黒い感情が胸に溜まっていく。私だってまだしてもらってないのに、それを奪うだなんて。

しばらくそのままにしてから口を離すと、女は私を一瞥して立ち上がった。

挑戦状、ということなのだろうか。私に翼君は渡さない、と。確かに彼はかつこいいから、ライバルが多いことは感付いていた。でも、今日に限って、それもこんなところで、しかもこんな状況で喧嘩を売られることになるとは。

私が翼君みたいに舌打ちをしてから彼女を追いかけようとしたとき、やっと翼君が意識を取り戻した。しばらくぼうつとして辺りを見回していた。その間も女はどんどん離れ、とうとう家の陰に身を隠してしまった。

翼君は、恋人と変な女に両サイドから観察され、でもそれに気が付いていない様子で立ち上がった。

彼は私のほう、背後など一回も気にせず、迷わず女のほうへ走り始めた。

「・・・」

まさかビハインドで始まることになるとは思っていなかった。この街に来て初めて混乱した。

なんで今まで平気だったかって？

だって、どこにいたって翼君がいれば大丈夫だから。

翼君も陰に消えた。私はそれを追いかける。足跡は立てない。浮気現場を目撃したときの鉄則だって、雑誌の小コーナーに書いてあった。

浮気という言葉を使ったけれど、よく考えてみたら違つかもしれない。

あの女が唇を奪っただけ。きつと翼君は、勝手にそんなことをされて怒り心頭、鬼のような形相でいるに違いない。

道を曲がると、別の道を曲がる女の姿が辛うじて見えた。そんなことがさつきからずっと続いている。女は一貫して歩いていて、オレは終始走り続けている。なのに距離は一向に縮まらない。

そして、どうやら誰かに見られているらしい。それはひどく温かいように、冷静なものだ。ガキの頃、遊んでいるところを近所の婆

さんに観察されていた時のような気分だ。けして居心地のいい代物じゃない。見ているやつを見つけて捕まえて、何らかの制裁を加えてやりたいところだけど、今はそれどころじゃない。

また、すんでのところで道を変えられてしまった。先回りするか？いや、土地勘のないところで下手な小細工を弄し、見失いでもしたら目も当てられない。かなりカツコ悪いけど、素直に追いかけるしかない。でも、それにも段々うんざりし始めていた。

もう二桁ほど目になる門を曲がると、鼻を懐かしい匂いがくすくすった。

「・・・海？」

目の前には長い下り坂があった。

果てにあるのは行き止まり。

道の両脇には、そこまで丁寧な家が並び、申し訳程度に柵、その奥に海原が広がっていた。

いつの間に現れたのか、あの黒い女が行き止まりに向かって移動している。歩いているのだけど、普通じゃない。まるで映像をコマ送りにしているような違和感があった。

乳酸が溜まって熱を持った膝を叩いて、オレは彼女を追いかけた。今更だけれど、オレはひとつ自分ができていることをやっていなかったことに気が付いた。

「待ちやがれ！」

爆発寸前の肺で目いっぱい叫んだ。喉が渴いていたから、ガラガラの声が飛び出た。

女は海の手前で止まって振り返った。短い髪が潮風に揺れる。

「何か？」

女は眉ひとつ動かさず言った。やっと口を開いたか、という落胆が感じられた。

呼吸を整えながら、オレは女を観察した。

年上のような、年下のような。ひよっとしたら男かも知れないが、胸がある。

そして、別人のようだったが、知っている顔だった。

「・・・やっぱ七海ななみか」

学生時代の盟友だ。

七海はノーコメント。じっとオレを見ている。

「何故、私を追いかけて来たのですか？」

「目を覚ましたらお前がいたから」

二人の距離は十メートルほど。雲は少しずつ色濃くなってゆく。

「それだけの理由で？」

「ああ」

「そうですか」

七海は体を横に向けた。

「まだ寝ぼけているようですね」

「あ？」

「そんなどうでもいいことの為に、汗を流して息を切らせて。貴方のイメージするスマートな人物像からは随分遠いのでは？」

頭の中身がすっと冷めていくのを感じた。何言ってもやがる。

「お前こそ、その口調は何だよ？鳥肌が立つぞ」

七海は海に向かって歩いていく。オレはこれ以上距離が開かないように歩いていく。道は断崖になっていた。

「貴方には恋人がいたはずです」

七海は海と空の間を見た。

「恋人？由利のことか」

「貴方、自分たちが交通事故に逢ったことは覚えていますか？」
嫌な事を訊く。

「・・・ああ」

「車に乗っていた貴方がここにいるのに、恋人はいないと判断したのは何故ですか？」

「なあ、よせよ」

オレは胸の前で腕を組んだ。

「久しぶりにお前に会えて嬉しいんだ。つまらないことから音信不

通になつちまつただろ。話したいこともたくさんあるんだ」

「恋人もこの町のどこかにいますよ」

「いいんだ。オレは、自分に嘘をつきたくない」

なんでこんなことが言えるんだろう。

なんでこんなに、本音を言うことが気持ちいいのだろう。

七海は振り返ると、懐かしい笑みを浮かべて両手を広げた。

「・・・バカヤロ、遅いんだよ」

オレはよたよたと歩いていき、七海に身を任せた。

忘れていたことを思い出した。

七海は、オレが世界でただ一人、心を許した人間だった。

喧嘩して、自棄になつて彼女を作つて、連絡が途絶えても、オレ

はずつと七海のことを必要として、求めていたんだ。

幸せとはお世辞にも言えなかつたけれど、それなりに緩やかな日

々の中で忘れるようにしていたこと。心にかけていた鍵を、七海の

体温とぬるい潮風が打ち破つた。

「燃えたよ」

「そう。よかつた」

七海の腕に力が入つた。心地よさに目を瞑ると、体が浮き、強い

風が皮膚を打つた。

強くなる海の匂い。オレは七海の首元に顔をうずめると、頬肉を

上げて笑みを伝えた。

何もできなかつた。

翼君が女に抱きついた時も、女が彼を抱えて飛び降りるときも、

私は遠い物陰からただ見ていることしかできなかつた。

やっと体が言うことを聞いた。私は急いで岸に走

目の前に黒い影が現れた。

走つてきた？

降つてきた？

飛び出した？

黒い女が部屋を出るのを確認してから、僕はそつと板をずらした。短い髪の女は唾えタバコのまま机に向かい、なにやらごそごそと探し物をしている。

その対極、先ほどまで黒ずくめの女が座っていた、その上から、僕は静かに糸を垂らした。

音も立てず、それを伝う。

音を立てないように、そして手早く着地する。

完璧だ。アクション映画の主役のように、いや、それ以上の仕事をしたはずだ。事実、彼女はこちらに気付いていない。紙で指を切つて、それを舐めようかどうか迷っている。ありがちな日常の一口マだ。

でも、迷った挙句指を舐めた女は

「誰？」

と無機質に尋ねた。

「・・・いつ気が付いた？」

「そのアホみたいなのシルエットで部屋が暗くなったところから。物書きの人生経験を舐めちゃダメだよ。ま、パンダの着ぐるみが不法侵入してきたのはこれが初めてだけど」

言われて気が付いた。そうだ、僕は今、普通の格好はしていない。浮き足立って注意力が欠けていた。

「なるほど、参った」

「おし、私の勝ち」

女はへらつと笑った。そしてタバコを手にすると、僕に向けて煙を吹きつけた。

「で、アンタは誰？その格好、暑くないの？」

「慣れると、思ったほどでもない」

女は僕に興味をなくしたのか、机に向き直った。

彼女はナイフを取り出した。

僕はとっさに身構える。そして冷静に考える。突いてきても難いできても、頭で受けてしまえばいい。動きを止めた後なら、どうにでもなる。

しかし、僕のどす黒い感情を吹き飛ばすように、女は鉛筆を取り出して削り始めた。とても慣れた手つきだ。危なっかしさがまるで無い。

啞えタバコの先に灰が積もっていく。それが音も無く落ちてても女は動じない。目の前の鉛筆を一心不乱に尖らせていく。

「用がないなら出て行ってくれろ？」

今日の雨みたいに冷たい言葉が飛んできた。

僕は立膝から正座に移行した。なんとなく、そんな雰囲気だった。唾を音がるほど強く飲んでから、僕は口を開いた。

「貴女は、誰ですか？」

「わっからなあい」

女は鉛筆をまじまじと眺めた。

「そもそもそれを訊いたのは私のはずなんだけど」

「す、すいません」

「随分若そうな声。歳は？」

「十七です」

「名前は？」

「春の人って書いてハルトです」

「よく覚えてるね」

僕は唇を舐めた。

「あの黒い女のお陰で、全部思い出しました」

女は思ったとおりのリアクション。作業をピタリと止めて、目を少し開き、横目で僕を凝視した。

「信じないかもしれませんが、僕は社会の裏の仕事をしています」
両手を強く握った。ここからの話が信じてもらえないなら、僕はこれからも一人で生きていかなくはならない。

裏の仕事と言っても、ヒトゴロシとかじゃありません。平たく噛み砕いて言えば、情報収集です。要人の行動を観察したりとか、そういうのを引き受けて、その見返りに莫大な報酬を頂いて生活してました。

僕がこの街の外で最後に覚えている景色は、夕方の公園。黒いスーツと黒いコート、そして黒いリムジンを止めた二人の怪しい男が取引しているところを観察していました。ノルマもなく、風船を持つてろろろしながら。

この時、普段なら絶対にやらないことをやってしまいました。知らない高校生が僕の背中の中のジッパーを下ろしたんです。ジッパーの割れ目から護身用の拳銃が落ちて。

はい、撃たれました。

そして、視界がブラックアウトしたと思ったら、この街に来ていたんです。

目を覚まして、一番最初にそこにいたのは、あの黒ずくめの女でした。え、クロさん、って言うんですか？じゃ、クロさんがいました。

クロさんは僕に小難しい言葉を並べると、どこかに行ってしまったんです。この時、僕にはまだ記憶は戻っていませんでした。自分が誰で、何でこんな格好をしているのか、わかりませんでした。

でも、本能、違うな、職業病って言うんでしょうね。危ないことには鼻が効いちゃうんです。一発でわかりましたよ、クロさんは怪しいって。

僕の寝ていた場所はジメジメした路地でした。クロさんは早足で去っていく。僕は屋根に飛び上がると、音を立てないようにこっそり後をつけたんです。

遠くに海が見えました。飛び込みたくなりましたが、なんとかその気持ちを抑えて、辛抱強く彼女を追いかけたんです。

当時、と言っても数時間前ですけど、この街には何人かの人間

がいました。小さい子供、歩くことすらできない老人、しきりに時間を感じさせるサラリーマン。いろんな人がいました。

そのことごとくが、クロさんと会うたびにいなくなりました。

本当に、文字通り、影も形もなくなっただけです。

観察していると、クロさんは他の人間に共通してやっていることがありました。

まず、話すこと。それも一方的に。そしてどうやら、その言葉ひとつひとつが、その人の心の中にある、大切なものをえぐっているようでした。

そして、触れること。打ちひしがれ、肩を落とした人に触れると、その時点でその人はいなくなります。

クロさんはそれしかしていません。一服するでもなく、食事を摂るでもなく、ただただ街の人を消して回っている。

おかしいと思いませんか？人を消せるということも、それだけに専念する、ということも。

僕は怖くなりました。怖くなって、またドジを踏みました。雨が強くなって、屋根が滑るようになったんです。

目の前に降ってきたパンダに、クロさんは言いました。

「そのままでもいいんですか？」
って。

その一言で、僕は全部思い出したんです。自分が誰で、昔何をしていたか。だからこそ、クロさんの怪しさに確信が持てた。異質さに体が震えた。そして、彼女とこの街に、溢れるほどの興味を抱いた。

お願いします。協力してください。クロさんの正体を一緒に探ってください。貴女は、僕が見てきたこの街の人で、僕以外で初めて、クロさんに会ってから消えなかった人なんです。

私はタバコを啜えた。最後の一本だ。

火をつけると、部屋の煙が濃さを増した。

彼の話を全く信用していないわけじゃない。確かに、冷静にしっかり考えればこの街がおかしい、そしてクロが怪しいことにも気が付く。いや、むしろ気が付かないほうが異常なのかもしれない。そう考えると、正常な彼を応援するのが道理というものなのだろう。

ただ、私はひとつ、彼に対して許せないことがあった。

一度も顔を見せないことだ。人と話すときは人の目を見て話したい。それが大切な話なら、尚更だ。大前提と言ってもいい。

それをパンダに伝えると、彼は少し悩んだ後、すっと頭部に手を伸ばした。

パンダの頭が外れて、私は後悔した。

彼の顔は、目を反らしたくなるようなそれだった。左半分は皮膚が溶けてくすんだ桃色が歪なさざ波を打っていた。右目は目蓋が取り払われており、必要以上にくりくりした目玉が苦しそうに干からびていた。上唇は裂けて三等分されていた。健全な皮膚も、擦り傷切り傷で埋め尽くされていた。そのひとつひとつが、彼の半生を物語っていた。

私は動揺を彼に見せなかった。これから一緒に事を成し遂げようとする人間に、失礼な態度は見せられない。そう思ったからだ。

「わかった。じゃあやりますか」

彼の顔が明るくなった。

と、同時に

透き通った。

「ありがとうございます」

満面の笑みで言うと、パンダの抜け殻は力なく床に萎れた。

雨脚がまた強くなった。

窓の向こうで、クロが笑顔で手を振っていた。

こんな馬鹿なヤツがいるのか。
そう思ってくれてかまわない。

彼女は、周りの評価こそいまいちだったけれどかなり魅力的な人だった。何ととっても笑顔が素晴らしい。天使と形容したって決して大げさではない。声は高貴な楽器を連想させるし、言動は無垢な子供に似ている。簡単に言うつと、惚れ込んでいた。恋愛に勝ち負けがあると仮定したとき、惚れた方が負け、という通説に則るならば、ボロ負けだ。

出合いが強烈だった。大学にいた時分、通路で友人らと他愛もない会話をして時間を潰していた。その最中、些細なことで友人のひとりがぼくの背中を押した。ぼくはバランスを崩し、窓際にふらふらと移動した。この時、偶然進路上にいたのが彼女だった。でも、この時点ではまだ赤の他人。ぼくは迷惑をかけまいとなんとか両手を窓に付くことで直撃を避けた。「すみません」と言いながら顔を上げると、目の前に彼女がいた。その状況は、気障な男が恋人にキスをする状況に酷似していた。

それから二人の仲は急接近した。実は同じ学科で同じ学年だということ判ると、名前を聞き、携帯番号とメールアドレスを交換した。暇なときを探しては彼女に連絡をしたし、彼女も同じようにぼくとの交流を求めた。彼女から連絡がくればどれほど忙しくても返事を返した。お互いが一方的に断ったことは片手分ほどもない。これがその年の春の話。

この夏が、ぼくの人生でもっとも輝いていた時期だ。海、山、祭り、花火。二人だけで、というわけにはもちろんいかなかったが、腹が痛くなるほど笑いながらいるんな経験をした。

たくさんのことを話した。彼女が実は母子家庭だということ、ま

だ離婚後の問題で両親が揉めていること、去年度に内定を貰った出版社でバイトをしていること、サークルの連中がちょっかいを出してきて迷惑していること。深刻なこともくだらないことも、仲間の輪をこっさり離れては語り合った。何より驚いたのは、二人が恐ろしく正反对だったことだ。例えば、ある事件のことをニュースで知ったとする。そのことについて語り合うと、ほとんど間逆の意見が飛び交う。分かり合えることは少なかったが、それが新鮮に感じられて、半袖でいると肌寒さを感じる頃には、議論が朝を迎えることも珍しいことではなくなっていた。

秋、ぼくは彼女に告白をした。手応えもあつたし、何より彼女を愛していた。学生の身分で生意気だと思いが、結婚することも考えていた。それくらい、真剣に彼女を想っていたのだ。

「付き合おう」

そう電話越しに伝えると、彼女は難色を示した。意外だった。てつきりぼくは、彼女に愛されていると思っていたのだ。

「ちょっと考えさせて」

早めに切り出された折衷案に、ぼくは力なく頷いて電話を切った。秋の夜長、一人きりの部屋でタバコを吹かして反省会を開いた。

真っ先に思い浮かんだのは、彼女がぼくのことを友人としてしか見ていなかった、つまり恋人としての魅力に欠けていた、ということだった。ライクではあるけれどラブではない、というやつだ。だとしても、ぼくは彼女を愛してしまった。この気持ちに嘘について生きていくことは、もうできない。

そこまで考えて、ふと胸に暗雲が滑り込んできた。物事は全て、リスクとリターンによって成り立っている。トスしたコインが表を向いてくれれば万々歳だが、裏を向いてしまったら、もう彼女とは連絡が取れなくなるだろう。いや、もし彼女が望んでも、ぼくがそれを許さないはずだ。実らない恋を諦めて、いずれ他の誰かと愛を結ぶ彼女のそばにいるなんて、ぼくには考えられなかった。

彼女がいなくなる。それはつまり、今のぼくの生活の根底を覆す、

ということだと気がついた。気がついてしまった。気がついたときには、再び彼女の番号を呼び出していた。

コール音が二回鳴って、彼女が出た。平然を装う彼女の声がぼくの胸を一息で絞り上げた。

「ごめん、何度も」

「ううん、何？」

「あの、さ、さっきの告白、やっぱり無し」

「え……」

無感情で無意識のリアクションにぼくは慌てた。

「いや、今ご両親のこととかで大変だよ。そういうの考えないで自分勝手に告白とかしちゃうって、その、ごめん」

彼女は怒鳴った。

「何、それ。こっちだって真剣に考えてるのに、怖くなって独りで勝手に逃げるようなことしないで！」

無機質な音を立てて電話は切れた。

一緒に、ぼくたちの付き合いも切れた。

電話はもちろん、メールも送れない。返信されないとわかっているメールを火急の連絡以外で送る人は稀だろう。

今まで通り友人に混じって遊ぶときも、二人はほとんど対角線を維持していた。彼女とたまたますれ違っても、わざと意識して顔を反らす。そんな日々がしばらく続いた。

会えない時間が愛を育てるのだと、誰かがカラオケで歌っていた。彼女のことを好きだという気持ちは変わらない。それどころか、彼女をいたずらに傷つけ、怒らせてしまったことに自責の念を抱き、押し潰されそうになっていた。恐れて逃げるようなことをしなければ、いや、もっと決意を持って告白していれば。ああでもないこうでもない頭を掻き毟る日々が続いたが、出会わなければ、好きにならなければよかったとは一度も思わなかった。

しばらく経ったある日。ぼくは別の女性に声を掛けられた。同じ学科で遊び仲間、名を由利と言った。彼女はぼくの袖を引っ張ると、

人通りのない影に連れて行った。

彼女はなんだか思いつめた表情で、しきりに辺りを見回していた。その行動が、ぼくの中に望んだような望んでいないような淡い期待を植えつける。

「ねえ、アイツと付き合ってるの？」

触れられたくない話題を出され、ぼくは苦笑いを浮かべた。

「この前フラれたよ」

「あ、そうなんだ・・・」

彼女の顔は随分と落胆していた。それを演技だと思ってしまっただと、当時のぼくは参っていた。

「あ、あのね？」

「うん・・・」

二人の間に妙な空気が漂い始めたとき、突然誰かが彼女を突き飛ばした。

湿気で薄く濡れていた芝生につんのめる由利。呆然と見守るぼく。その間に、ぼくが思いを馳せた彼女がいた。肩で息をして、物凄い形相だった。

彼女はぼくの手を取ると、一目散に走り出した。人で溢れた廊下を駆け抜け、退屈そうな恋人たちが語り合う階段を駆け上り、ゆるい太陽が立ちすくむ屋上に辿り着いた。

彼女はぼくの手を離すと、ここまで来たそのままのスピードでフエンスまで進んだ。

金網を掴んで、肩で息を整えると、彼女は天を仰いで

「鈍感！」

と叫んだ。

それがぼくのことを言ったのか、それとも自戒だったのかはわからない。とにかくぼくたちは、その日からようやくと交際を始めた。

好きになった人間が、付き合ってみたらとんでもない人間だった。よく聞くありがちな話だが、味わったのは初めてだった。

彼女と付き合っていくのは大変だった。

自慢ではないけれど、人より恋人の数は多いほうだと思う。それなりに経験もしてきたし、知識も引き出しもある。だから恋愛くらいで落ち込んで、ベランダで干される布団みたいな格好をしながら厭世的に溜息だらけの紫煙を漏らす、なんてことは一生ないと思っていた。

彼女はまず、ぼくの健康を気遣う、という建前でタバコを禁止した。「お互いの意見を尊重」したいらしいが、じゃあぼくがタバコを吸う自由はどこに行くんだよ、と思った。しかし喫煙者が世間的に迫害されている今、ぼくの意見はただのわがままにしかならなかった。結果、ぼくの部屋にあるライターと灰皿たちは、それぞれに少しだけ秘めた淡い思い出と共に燃えないゴミの日にまとめて放り捨てられた。

そして、わかっていたことだけれど、やっぱり彼女とはとことん趣味が合わなかった。例えば映画では、ぼくは細部にまで日本人独特の表現が散りばめられた邦画が好きなのに対し、彼女は甘い言葉とストーリーと字幕が並ぶ洋画を好んでいた。初めこそぼくも譲ってはいしたが、どうしても観たい作品があったときは彼女を引っ張っていこうとした。受付のフロアで怒鳴りそうになっただくらいだ。しかし彼女は「そ？じゃぼくはこっち」と言っただけで別の映画のチケットを買ってさっさとシアターに入ってしまった。ぼくが彼女の性格を本格的に疑い始めたのはこの時からだ。

極めつけはその束縛だ。しかもそれは緩急が激しかった。携帯電話の着信履歴や受信履歴、送受信したメール、そして週に一度のメモリチェック。ここまで来るともう監視だ。

そのくせ、当の本人は神出鬼没だ。いきなり連絡が取れなくなったり、学校を休んだり、デートの約束をすっぱかされることもあった。

段々と初心を忘れ、ギスギスし始めた二人の間に、今日の昼間、ダメ押し的一点が入った。

彼女は久々に来た由利からのメールを見つけると、かんしゃくを起こして怒鳴り散らし、テーブルを蹴つ飛ばして部屋を飛び出して行ってしまったのだ。なんのことはない恋愛の相談なのに、「そういうのが浮気の火種になるの！」とへんてこな理屈を言い捨てて。何処に行ってしまったのかわからない。当時、ぼくの心を占拠していたのは「これで今日始めてのタバコが吸える」という安堵だけだった。

二本目を吸い終わると、ぼくは由利に返信を打ち始めた。

由利はあの日も、ぼくに告白をするわけではなく、恋愛の相談を投げるつもりだったらしい。それは今でも細々と続いている。もっとも、誰かさんがいないときに限った話ではあるけれど。

そういえば、あの時どうして彼女が飛び出して来たかが最近わかった。彼女はぼくが煮え切らない電話をした日以来、ぼくのことを付け回していたらしい。聞いたときは「そこまで愛されている」と思ったものだけれど、今となってはぞつとしない話だ。

あの時、彼女の思いに感動ではなく恐怖していたら、ぼく的生活はもっとと有意義なものになっていたに違いない。透明な短い鎖に繋がれたそれではなく、帰る巣がある鳥のような生活が送れたに違いないのだ。

無難な回答を十行ほど入力して、送信。ボタンを押した指はそのままタバコを求めた。

由利に愚痴は吐かない。彼女はぼくのことを信頼してくれているから、弱い部分や汚い部分は極力見せたくない。

それはきつと、「自分はスマートに恋愛をしている」と思って欲しいのだと思う。ただの友達にすら弱みを見せられない、小物らしい小さな器にすっぽり納まった、小さなプライドだ。

三度煙を吐くと、申し訳なさそうに雨が降ってきた。

以前のように、部屋で吸うことも考えたけれど、彼女が戻ってきたときにまたキレられては面倒だ。ぼくは舌を打つと、携帯灰皿にタバコを押し込んで、カンパニユラのプランターの裏に隠した。

ソファに腰を下ろし、大きく背中を預け、何も無い天井を見上げる。

頭に浮かんだフレーズのことを考える。

好きになつた人間が、付き合つてみたらとんでもない人間だった。これだから恋愛と女は苦手で嫌いだ。清んだ響きの言葉のわりに、その中身は、好意という定数から、不平不満や理想を妥協という補正を加えながら引いていく作業に他ならない。無意味で無駄な計算を解いていくうちに、答えがマイナスにならないように苦悶して、その影響で滅入る。全く以つて徒労だ。そう判っているのに、また恋に落ちて堕ちてしまう。

人を見る目が無いのではない。

人間なんてものは大概そういうものなのだ。

決めた。

もう恋は止めよう。

結論と同時に溜息を出すと、携帯が勢い良く震え出した。この無神経な音に比べたら、雨音はさながらクラシックだ。

メモリに登録していないので名前は出ないけれど、見慣れた番号だった。これは由利だ。先ほどのメールの内容に疑問点でもあったのだろうか。

違う。

由利はぼくの彼女が、自分以外の女と携帯を使って連絡することを毛嫌いしていると知っている。にもかかわらずの電話。

妙な胸騒ぎがして、ぼくは手早く携帯を開いた。

「もしもし、どうした？」

「悪い知らせ」

沈んだ声。

焦りと恐れに浸りきつた、心臓が縮まる声。

「七海が倒れたって」

ドラマでしか観たことのない機械が、七海の枕元で意地悪く鳴い

ている。

「オレが鳴り止んだら終わりなんだぞ」

軽快な電子音が鳴る度に、そう言われている気がする。

七海は重度の呼吸障害を生まれながらに持っていたそう。驚いたことに、由利はそれを知っていた。彼女は普段行かない、車通りの多い道で排気ガスを大量に吸ってしまった。そして運の悪いことに、マナーの守れない喫煙者の吐いた煙が彼女の肺を直撃した。

彼女は街中で昏睡。通りかかった老婆が救急車を呼んで、救急隊員が携帯電話の着暦の最上段にある由利を呼んだ、ということだ。うだ。

この突発的な状況で

ぼくは

予想以上に

冷静だった。

腕を組んでパイプ椅子にもたれ、強く短く息を吐く。

七海はとりあえず無事だ。こうして生きている。医者の説明はよくわからなかったけれど、とりあえず命に別状が無いことはわかった。ただ、意識はいつ戻るかわからない。この二点がわかれば充分だ。

暗い廊下から、由利が顔を出した。

「意識、戻った？」

ぼくは首を振る。

由利は溜息で一拍置いてから、わざとらしく腕時計を見た。

「帰ろう。面会時間終わるよ」

ぼくは無言で立ち上がった。由利もぼくを見ることなく、そそくさと歩き出す。その後ろを程よい距離を置いて追う。病室の扉を後ろ手に閉め、振り返らないようにして不気味な廊下を進んで似たような階段を降りた。

広いロビーで、由利が「何か飲む？」と大声で聞きながら自販機へ進んだ。ぼくはコーヒートを注文しながら、玄関へ進んだ。

病院に入るときに見つけておいた、屋根の下のベンチに腰を下ろす。携帯灰皿、タバコと取り出し、ライターに手を掛けたところで由利がやってきて、溜息をぶつけてきた。

「まだ懲りてないの？」

かまわず火をつける。彼女が突きつけてきた黒い缶のコーヒーの封を開け、喉に流した。思いのほか、口の中は乾いていた。

由利はレモンティーを少し飲むと、ぽつりと零した。

「タバコ、止めなよ」

「何、それ。七海の差し金？」

「街でアンケート取ったら、十割近く私と同じこと言うと思うよ」

「憶測で物を言うなよ」

「憶測を真実に変えるだけの自信があります」

ぼくは鼻で笑った。

由利は喉を湿らせる。

「先天性呼吸障害のこと、本当に知らなかったの？」

「言っただけだったし」

「言っただけだよ、と思った。」

「七海はそんなに大切なことをぼくに言わなかった。頭ごなしにタバコを止めるって言うだけだった。物事は多方面から見ないといけない。ぼくにとって、タバコは息抜きなんだ」

「訊かなかったの？」

由利の声は、喉と裏腹に乾いていた。

「付き合うときに、いちいち障害はありますか？って訊けって？」

「何でそこまでタバコが嫌いなのか、訊かなかったの？」

「タバコが嫌いなのは特別なことじゃない」

「私が言いたいのはそんなことじゃない」

由利は腰を浮かせ、ぼくを正面に見据えた。

「七海の昔の事とか、知らないでしょ？七海の前は彼氏がね、すごく女にだらしないヤツだったんだって。トラウマ、って言うのかな。不安になっちゃう気持ちもわかってあげてよ」

ぼくは無言でタバコを吸う。

「虐待されてたことは知ってる？七海の背中、見たことある？お父さんにやられた傷跡がたくさん残ってる。タバコの火種を押し付けられたんだって」

最後の一言で、煙が一気に不味くなった。

「そんな七海が、なんで喫煙者で、自分勝手な俊介に惚れたと思う？」

小さく首をかしげた。

「本人も同じリアクションしてた。恋愛っていうのは理屈じゃないんだね。二人を見てると、改めてそう思えちゃう」

「何だよ、それ」

ぼくはタバコを捨てる。

由利は相変わらず真顔で言った。

「七海の愛は一方通行だったんだな、ってこと」

「・・・」

「俊介も惚れてたんじゃなかったの？なのに、七海のこと、何も知らない。名前と顔と、嫌いなところくらいしか覚えてない。どんどん嫌いになってるのに、何で付き合ってるの？何で、病院に来たの？」

「由利にはわからないかも知れないけれど」

コーヒートの苦味はタバコの残り香とよく合った。

「愛しかたつていうのは人それぞれなんだ。世の恋人たち全部が全部、漫画やドラマみたいに愛を紡ぐわけじゃないんだよ」

「馬鹿にしてる？」

さすがに語調が強くなった。

「そのくらい知ってるよ。私の前の彼氏は、手も握ってくれないまま事故で死んじゃったんだよ？」

なら、反論なんかしてほしくなかった。ぼくは今疲れている。独りにしてほしかった。そっとしておいてほしかった。

「そんな、あからさまに嫌そうな顔しないでよ。これで最後にする。」

ひとつ訊きたいことがあるの。お願い。強がったり嘘つかないで、正直に答えて」

「・・・何？」

「相手にぬくもりを与えない。そのどこが愛なの？」

「・・・」

「相手に安心を与えない。そのどこが愛なの？」

「・・・」

「ねえ、俊介。愛の形がないことを逃げ道にしてるだけじゃないの？」

強くなる雨。水の流れるアスファルトにコーヒーの缶を投げつけた。

「ああ、そうだよ！ぼくは七海が何を考えているのかわからなかった！だから、あいつのことを知ろうとする気持ちも消えた！」

「・・・」

「はは、そうだよ。ちょうど先月あたりからかな。あいつが別の星の生物みたいに思えてきたんだ。思考ルーチンがわからないんだ、別に誰かに怒られるようなことじゃない」

「・・・」

「嫌いな気持ちが増えていくのに、好きって思いが無くならない。

ぼくがどんなに想っても、ぼくにはあいつの愛しかたが判らないんだ！」

由利が言った。

「なんだ、馬鹿なんだ」

ぼくは振り向くと、ベンチを思いつきり蹴飛ばした。ベンチの足が削って、レンガが悲鳴を上げた。

でも由利は意に介さず、哀れみを多分に含んだ目でぼくを見上げていた。

「自分の愛しかたを使い回せなくて拗ねた俊介と、自分の愛しかたを不器用なりにも貫いた七海。どっちが馬鹿だと思う？」

「・・・」

「私は両方だと思っけどね。でも、拗ねたってところで、俊介のほ
うがちよつと上かな」

彼女はわざとらしい溜息をついて立ち上がった。彼女は一貫して、
ぼくの目を見つめている。

「今言ったことを、恥ずかしがらないで七海に言えばよかつたんじ
やないの？それができないのって、多分プライドとかそういうもの
のせいだと思っけど、言ったときの俊介と今の俊介、どっちがかつ
こ悪いと思っ？」

心を見透かされていたのか、顔に書いてあつたのか、それとも彼
女の身の上話だったのか、わからない。わからないけれど、彼女の
台詞はぼくの心の熱を一撫でで消し去つた。

「駄目だ」

ぼくが呟くと、彼女はさっきのぼくのように首を傾げた。

「やっぱり女は苦手だ」

彼女は薄く笑つと、胸板越しにぼくの心臓を拳で叩いた。

「そのくらいのジレンマ、乗り越えて見せてよ。せつかくのいい男
が台無しだよ？」

意地悪い笑みを見せられた。あてられ、苦笑する。

「由利は強くなつたよ」

「そっ？」

「うん。今後、生死の境をさ迷つた人間は敵に回さないようにする
よ」

冗談のつもりで言ったのに、由利は遠い目をして雨を見上げた。

「いろいろ、いじめられたから」

台詞の真意はわからなかった。興味が沸いたので深く訊こうとし
た。でもそれを遮るように、彼女は土砂降りの雨の中に入っていく。
「久しぶりに」濡れて帰ろうつと」

独り言で提案されてしまった。

ぼくは由利の後を追つた。今度は、ちゃんと表情が見える位置を
歩いた。

「愛つてのは、良くも悪くも人間を狂わせると思うんだ」

目を閉じ、機械に呼吸を手伝ってもらっている七海に語りかける。「その熱に当てられると、誰も彼も正気でいられなくなる。正常な判断ができなくなる。常識を入れ替える、なんて非常識なことを平然とやり遂げてしまう。愛は劇薬に違いない。

でも、それを良しとしてしまう。平然と受け入れるどころか、自ら望んでしまう。つまり、人間は愛に弱いんだ」

木漏れ日が赤みを帯びた。

「ぼくは、それをみつともない、かつこ悪いことだと思っていた。愛なんて不確かなものに振り回されるなんて、なんて弱いんだろう、そう思っていた。そう思いながら、小さくて拙い自分のプライドを守ろうと必死になっていたんだ」

点滴の針が刺さった腕にそつと手を添える。

「お願いだ。目を覚まして。すぐでなくてもいい。ゆっくり休んでからでいい。でも、頼む。必ず目を覚まして。七海に伝えなくちゃいけないことがあるんだ」

廊下から由利が顔を出した。

「意識、戻った？」

ぼくは首を振る。

「そっか。じゃ、また来週来よう」

「ごめん、もう少しだけ」

ぼくがわがままを言うと

「映画に遅れちゃうよ」

彼女は子供みたいに頬を膨らませた。

ぼくは腰を上げると、彼女の手を握って病室を出た。

こんな馬鹿なヤツがいるのか。

そう思ってくれてかまわない。

かまわないよ。

軒下で雨をやり過ごそうと膝を抱えていたら、隣のボ口屋から黒ずくめの女が出てきた。

あの女、見たことがある。街の中を闊歩しては、出会った人間を手当たり次第に消してしまう手品師だ。悪魔、って気はしない。天使ってわけでもないけどな。アレは人間だ。オレの直感によく当たるんだ。

後ろ手に戸を閉める女と目が合った。オレは知らんぷりして向けていた片目を閉じ、狸寝入りをする。

女がどこかにいってくれるよう、祈った。他人は苦手なんだ。しかし願いは届かなかった。女はこちらに歩み始める。

オレは気転を効かせ、今度は何もせず何も言わず通り過ぎてくれることを祈った。

でも、それも叶わなかった。女はずうずうしくオレの隣で膝を曲げ、それを抱えた。親に怒られた子供が拗ねるポーズにそっくりだ。

ま、関係ないけどな

そう、関係ない。特に言いたいこともないし、聞きたいこともない。それは女も同じはず。そもそもこの女はオレの言葉に耳を傾けないはずだ。なんのことはない。いつも通り、無関係を装い、そうあり続ければいいんだ。時間がなんとかしてくれるさ。

だが、女は不躰にも、オレの頭を撫でた。泥水で汚れ、くすんでしまったこの頭を。

「あなたも、この街に来たんですね」

のほほんとした顔でそんなことを言いやがる。背のわりに小さい手のひらは、泥でべとべとになって気持ち悪いくらいだろうに、奇特なヤツだ。

「好きですか？この街」

街は大概嫌いだ。良識を知らないムジャキな子供、ストレスとジ

レンマで暴走するおっさんやおばさん、オレみたいなヤツを目の敵にしてくる頭の悪そうな団体。心休まる場所なんてありやしない。ま、実家を追われた時点で、安らぎを求めるのもお門違いな話なのかも知れないが。

「私は、嫌いなんです」

私「は」、ってことは、やっぱりオレの顔色なんか伺っちゃいな
いってことだな。ったく、せっかくさりげない合図を送ってやった
つてのに、無駄に終わっちゃったじゃねえか。

女は雨を眺める。人間が雨を眺めるときは、大体寂しいときだ。

「私は、なんでこの街に来たんでしょう？」

問いかけだろうが何だろうが、一貫して無視だ。話を誰かに聞いてほしいわけじゃない。為になるアドバイスなんか求めてない。こういうヤツらは、ただ言いたいだけなんだ。相槌のひとつだって邪魔になるだけだ。聞き流せばいい。それが礼儀ってもんだ。

「よかれと思ってやったことが全部裏目に出て、とうとう体に限界が来て。一番疲れているはずなのに、まだ一番歩いている。余計なことをたくさんしながら」

耳の裏が痒い。

「ふふ、善行なんて自分のためっていうのは本当なのかも知れませ
んね。ああ、また一人助けた、と胸を撫で下ろした瞬間、すぐに胸
が詰まるんですから。この街で感じられないなら、幸せなんて、本
当は世の中には無いのかも知れませぬ」

馬鹿らしい。

人間、いや、生命ってのは本来利己のために生きるもんだ。勘違
いして欲しくないのは、優しさとか情けとか、そういうものが要ら
ないって言いたいわけじゃない。それが自分の決めた道、自分の行
き方を決めるほど大切なものなら、迷うことなく突き進めばいい、
ってことだ。

オレの親がそうだった。オレが生まれて間もなくいなくなっ
てしまった親父の代わりに、お袋はそれこそフンコツサイシンの覚悟で

オレを育ててくれた。家を追い出されたときも、ガキどもに絡まれたときも、オレだけは無傷で逃がしてくれた。

そんな生活の果て、お袋はずいぶん前に先立った。そりゃあ悲しかったけど、可愛そうだななんて思わない。お袋は公言通り、オレを一人前に育ててから逝った。タイガンジヨウジユってやつだろう。

命よりも誓いを優先して、懸命に人生を駆け抜けたお袋を、オレは本当に誇りに思っている。そんなお袋をずっと眺めてきたから、オレは独りになってから叩かれ続けても生きてくることができた。

自分で歩くと決めた道。イキヨウヨウと歩き始めた癖に、道半ばで疲れたから世界のせいにして自分はよくやった、なんてご都合主義、しみつたれた神様が許してもオレが許さない。泥だらけになつて傷だらけになつて、何か一つでも成し遂げて、それから死ぬ。

そう目で言った。

女はこちらを見ない。さつきからずっと、馬鹿みたいにオレの頭を撫で続けている。頭皮が熱を持ち始めやがった。

馬鹿女が。・・・いや、馬鹿なのはオレのほうが。シヨシカンテツ、感情など寄せず、無視を決め込んでいればいいんだ。

「ふふ、ごめんなさいね。突然つまらない話を聞かせてしまつて」
つまらなく、は、なかつた。あまり長い人生でもなかつたけれど、思う存分振り返ることもできたし、自分の生き方を再実感することもできた。

この馬鹿女も、少しは気が晴れただろう。

人生は長い暇つぶし、そう悟つたふりして開き直つて全部を前向きに諦めるヤツがいるらしい。

そういうヤツからこそ馬鹿としか思えない。生命に限りがあることなんて皆知っている。その短い人生に一つの意味も見出せないのなら、何もするべきではない。道路にでも古井戸にでも飛び込んでさつさと死ねばいい。

女は立ち上がった。

そうだ、その澄んだ顔のままどこかに行つてくれ。オレはわかる

んだ。もうオレに残された時間が長くないことが。降ったり止んだり
りを繰り返してきた味気ない雨。この雨が降り止むのを見ることは
無いだろう。視界もぼんやりしてきた。頭以外は寒くて仕方がない。
「やると決めたらやりきらないと、ですよね。もううじうじ悩む時
期は終わりましたから」

首の位置を変える。わかったから失せる。

「君と、あと一人。それで私の仕事も終わり」

溜息交じりの声は震えていた。

・・・まあ、そうか

部を越えたことをしようとするなら、それだけ強い覚悟と意志が
必要なんだ。そう、お袋みたいに。

仕方ねえな、一声だけかけてやるう。同情でもなんでもない、素
直な気持ち一度だけ投げてやるう。石を投げられても、耳を掴ま
れても、尻尾を引きちぎられそうになっても何も言わなかったオレ
が口を開くんだ。光栄に思え。

ま、頑張りな

「にゃあ」

「まあ、可愛い声で鳴くんですね」

女はもう一度オレの頭を撫でると、

「お疲れ様でした」

オレを消し始めた。

体が軽くなる。体の傷が癒えていく。今まで足を引きずりながら
歩いてばかりだったから、とても心地いい。天にも昇る気持ち、い
や、正にその準備、または途中なのだろう。

もし生まれ変わるなら、あの女のような馬鹿に生まれたい。で
きることなら、あの女の代わりをしてやるう。

女がいなくなると、女が出てきたボ口屋へ別の女が向かった。

女の言っただけのことを鵜呑みにすると、きっと、アイツが最後の一
人だ。間抜けそうなツラのくせに、深刻そうな表情をしていやがる。
何かの縁、だな。お前も頑張りよ

涙雨

できるだけ大声で言った。
女が振り向く頃には、オレはすっかり消えていた。

雨の中を傘も差さずに街をさ迷い、行き着いたのはタバコ屋だった。行き着いた、というよりは足が向いた、と言った方が正しいかもしれない。

私が足を向けたのはいくつか理由があつて、まずは手持ちのタバコが切れてしまったこと。これが一番大きな要因。そして同じくらの重要さで、人の姿が見えたのがその店だけだった、ということ。おや、どうやら行き着いた、と言った方が正しいようだ。

上から押しつぶされたような、可愛いお婆さんがこちらを優しく眺めていた。自販機が一般的なこのご時勢に手売りとは珍しい。

雨がしのげる申し訳程度の軒下に潜り込み、銘柄を言いながら指を二本見せた。

お婆さんはまるで用意していたかのように、腰元から二つ取り出すと、私に渡した。私がライターを取り出すと、お婆さんは使い古された銀色の灰皿を出した。つられる様に微笑んで、私は新品のタバコに火をつけた。

「わたしも、いいかね？」

と言うと、お婆さんは懐からくしゃくしゃになったタバコを取り出した。私は何も言わずライターを差し出し、お婆さんがタバコを啜えてから火をつけた。

「お婆さんは、もう長いことこのお店を？」

「ええ、タバコ屋になって、もう三十年くらいになるかねえ」

「へえ、老舗ってことか。道理で慣れてますね」

「ふふ、そうかい？ありがとね、そう言われると救われるよ」

「・・・」

「何か訊きたそうな顔だね？」

「訊いてもいいことなのかどうか・・・」

「かまやしないよ」

「……お名前は？」

「……なるほどね、そういうことかい」

「……？」

「どうしたんだい？」

「いや、猫の鳴き声が聞こえたような……。気のせいですね、ごめんなさい」

「気のせいなんかじゃないさ。しばらく前にこの街に来て、飲まず食わずで雨を眺めていた傷だらけの白猫。その最後の一鳴きだよ」

「最後……」

「そうさ。なんだい、アンタ全部知ってるってわけじゃないのかい？」

「名前を思い出したらクロに消される。そう思っていました」

「クロ？ああ、あの子のことかい」

「クロのことを知ってるんですか？」

「アンタはどこまで知ってるんだい？こんな時に会ったのも縁だろう、わたしが知ってることは教えてあげるよ」

望んでいた状況だ。

私は知っていることを話した。気がついたらこの街に来ていたこと。初めは何も不思議に思わなかったこと。彼女が来ることを当たり前だと思っていたこと。彼女が私の過去を知っていたこと。春人という青年がやって来て、クロが街の人を消して回っているということ。そして目の前で、彼が彼女に消されてしまったこと。

話している間に、私は二本、お婆さんは四本のタバコを灰にした。私が三本めのタバコに手をかけると、お婆さんはシワだらけの口をゆっくりと動かし始めた。

「一番わかりやすいのは、その春人って子かねえ。その子は早いうちにあの子の不思議な所業に気がつき、その秘密を探ろうとした。そして自分以外で残っていたアンタに協力を仰ぎ、アンタが話に乗った時、あの子に消された。そういうことだね？」

「はい」

「その子はきつとひどく安心しただろうねえ。わけもわからないままここに飛ばされ、ひとりで何かを成し遂げようと思っていた。そこに仲間ができればようとしていたんだ。嬉しかっただろうねえ」

「?・・・あの」

「彼は幸せだったんだよ。だから消された、いや、消されることができたんだ」

「・・・」

「彼が本当に幸せかどうかはわからない。所詮他人の考えることだからね。でも、消されたつてのはそういうことなんだよ」

「消された、というのは、つまりどういうことなんですか?」

「この街からいなくなった、つてことさ」

「そのまんまなんですね」

「考えているほど単純じゃないかもしれないけどねえ」

「え?」

「この街に来た、つてことは、現世では死んだも同然、いや、死人の予備軍つてところかねえ」

「それはどういう・・・」

「アンタも見たり聞いたことくらいあるだろう、意識不明の重態つて状態」

「え、ええ」

「その意識はこの街に来るのさ。そして行き場もなくうつろつく。やがて自分のことに気がついたり、思い出したり、誰かと出会うことで元の世界の体に帰って行く」

「・・・思い出せなかった人は?」

「帰るより、逝く道のほうが短いんだよ。帰る気力を無くしたやつから死んでいく・・・顔色が悪いよ、大丈夫かい?」

「・・・はい。それよりも、そうなるかわからないことがあります」

「あの子の存在と行いだね?」

「はい。この街のことにはもちろん驚きましたけど、身に覚えがないわけではないので。それよりも、今のお婆さんの説明だと、蘇生

も死亡も本人の意思と努力次第、と取れます」

「努力つてのは一人ですもんじゃないよ」

「・・・」

「思えば長いこと生きてきた。いろんな人間を見てきたよ。額に汗を浮かべて走り回るサラリーマンも、退屈そうなお若い女の子も、独りで生きてるわけじゃない。隣に誰かがいて、知らないうちに互いに助け、関与しながら生きていく。言ってみれば、そういうのを優しさ、と言うのかも知れないねえ」

「・・・じゃあ、クローは」

「あれは優しい子だからねえ。生きていく間に自分が与えてもらえなかったものを、ここぞとばかりに与えて回っているのさ」

「そんな・・・」

「例えばさっきの春人って子。あの子がもし蘇生したとしても、その後待っているのは冷たい現実だけじゃないのかねえ？」

「・・・そんなことは誰にも決め付けられませんよ」

「彼が決めたさ」

「・・・」

「誰もがこの街に迷い込むわけじゃない。向き合わなければならぬ現実を置いて来た連中だけがやってくるのさ。そのことすら忘れた状態でねえ」

「・・・」

「あの子は春人君に聞いたはずだよ。何も覚えていないのか、と。そして彼はその言葉で記憶を取り戻した。自分のことをまざまざと思い出した。でも、そのときにあの子には、もう全部わかっていただんだよ。そういう子なんだ」

「そういう、とは？」

「そこだけは特別なのだ。あの子は人の痛みがわかってしまうんだよ」

「そんな馬鹿な・・・」

「本当だよ。その力を与えたわたしが言うんだから、間違いない」

訪れた沈黙は長かった。私は何を言っていないかわからず、お婆さんは私の言葉を待っているで口を開かない。雨も小降りになつてきた。

「お婆さんが、この街を作ったんですか？」

「突飛な発想だねえ。作っちゃいけないよ。ただ管理しているだけさ」「管理？」

「そう。迷子をちゃんと送り出す仕事さ」

「その仕事を、今はクロが・・・」

「独りで、ね」

「何故、彼女に？」

「人の痛みがわかる子だったからさ」

「？ でもそれはお婆さんが彼女に与えたって・・・」

「力を与えたところで、理解できない子には理解できないよ。あの子は傷つけられ、裏切られ、捨てられ、見放された拳句、流れてきた子だ。事実、今回の波の消化は初仕事とは思えないほど早い。それはつまり、あの子がより早く、正確に人々の心に触れられる、ということ。悪気は無いんだけど、逸材としか言えないねえ」

「・・・クロは、どうなるんですか？支えるだけで、助けるだけで、誰にも助けてもらえない彼女は、この街に独りになつてしまった後、どうなるんですか？」

お婆さんの指からタバコが落ちた。暗くてよくわからなかったけれど、彼女の体は徐々に透き通ってきていた。きつと、私と話し始めた時から、少しずつ、ゆっくりと消えていたのだ。

「さあ。わたしはのんびりやってきたから間が開く、なんてことなかったしねえ。これから起こることがどうなるか、わたしにはわからないねえ」

「それって・・・」

「もうすぐ、わたしは消える。やっと休むことができる。あの子が来てくれたから。仕事を引き受けてくれたから」

「・・・」

「そして、お嬢さんが最後の一人。お嬢さんをこの街の外へ導けば、彼女の仕事もひとまず終わる。次にこの街に人が来るのがいつになるか、それは誰にもわからない」

「・・・」

「泣かないでくれ。そして考えておくれ。なんであの子が、お嬢さんを見逃し、最後まで残したか」

私はタバコを消し、涙を手で強く拭った。お婆さんは微笑んで私を見上げてくれていた。

「クロは、今どこに？」

「海の見える丘に行ったよ。あの子のお気に入り場所さ。この道をまっすぐ進めば、すぐに見えてくるだろうよ」

「わかりました」

お婆さんは一層強く微笑み

「毎度ありがとうございます」

気の利いた言葉を残して、消えてしまった。

まだ私が「ありがとうございます」を言っていない。なのに、勝手に消えてしまった。

雨脚が増した。

土砂降りだ。

雨の音に嗚咽を隠しながら、私はクロの元へ急いだ。

優しさとは何なのだろう？

愛は地球を救うらしい。そんなことを信じたことはない。むしろ疑っているし、真つ向から反論してやる気持ちすらある。

世界は繋がっている。誰かのやらかしたわずかなミスが他の誰かの人生を変えてしまう事だって、きつとまま在る。もちろん、逆も然りだ。誰かのちょっとした優しさが

そう、誰かの優しさが、その誰かを滅ぼしてしまう事だって、充分に考えられる。

何にもリスクとリターンがある。望んでも望んでいなくても。そして事実というのは得てして皮肉に満ちていて、望んでいないリスクとリターンの出現率の方が圧倒的に高い。

そんな優しさは、止めさせないといけない。それが戦友なら、尚更だ。

彼女は誰もいない街を背に、何も見えない海を眺めていた。

曇天の空はただ黒く、海は静かに、それでも確かにうねっていた。この街の業を全て飲み込み、表しているような有様だった。

「何か見える？」

大きな声でク口を呼ぶ。

彼女は真顔のまま振り向いた。雨が涙のように頬を伝っている。

「何も見たくありません」

澄んだ声。それは冷たく私の心に滑り込んでくる。

もっと凄惨な表情をしていると思った。しかし彼女は、思いの他さっぱりした顔をしていた。まるで、何かをやり切ったようなそれだった。しかし私には、まるで自分を無理やり肯定しているような不安定さも同時に伺えた。

涙雨

何も知らないまま、この街での生活を終わることもできる。脳裏によぎった妥協案を掻き消しながら、私は言葉を紡いだ。

「タバコ屋のお婆さんに聞いた。あなた、大変だったのね」

「同情なら、やめてください」

彼女はまた海の方を向いた。いや、私から目を逸らしたただけだ。

「興味があるだけよ。ねえ。聞かせて、あなたのこと。あなたの口から聞きたいの」

クロは基本的に無表情だ。そうだと思う。私に私の話をしてくれた時もそうだった。眉一つ動かさない。でも彼女は春人を“送った”時に微笑みかけてきた。そして今、肩で呼吸を整えている。

気丈に仕事をこなしてきた彼女の心が、パンクしようとしている。詰まる息を細く吐き、私はクロの言葉を待った。

「・・・先生から消すべきだったのかも知れませんか」

そう言うと、クロは腰をべたりと落とした。

「思い出しました？わたしのこと」

私は頷く。

「大原七海。私のことを考えてくれて、行動に移してくれた、現役大学生、そして、バイトの敏腕編集者」

彼女は溜息をつく。

「先生が意識不明の重態、と聞いてから、私生活は荒れました。彼氏とも上手くいかなくなつて、それも手伝って持病の発作が起こつて、この街に来たんです」

雨が緩やかになる。代わりに風が出てきた。

わたしのことを初めて見つけてくれたのは、お婆さんでした。お婆さんは雨に濡れるわたしを家に連れて行くと、体を丁寧に拭いてくれました。

「お嬢さんが何でここにいいのか、わかるかい？」

「お嬢さんは寂しいのさ。だから、誰かに会いたくてこの街に来ちまったんだよ」

「可愛そうに。本当に優しい子なのに、不器用なんだね。その上不運だ。歯痒かっただろうに」

わたしの心持ちを読み取るように言って、最後にこう付け足しました。

「弱みに付け入るようで悪いんだけど、一つお願いがあるんだ。その優しさで、わたしや街の連中を、救ってあげてくれないかい？」わたしはお婆さんのお願いを聞きました。それは、わたしが望んでいたことでしたから、断る理由なんかありませんでした。

やっと、誰かの役に立てる。本当に嬉しかったんです。

でもね、先生。わたし、本当にバカなんです。幼馴染の恋の相談に中途半端に乗って、返って悩ませてしまって、結果的に彼は事故に会ってしまった。同乗していた恋人は助けることができたけど、彼は救えなかった。それでむしろくしゃして、恋人に八つ当たりのような真似をしてしまった。

先生にしたってそうです。先生の為を思っただけとは言え、とても最善とは言えない方法でしたよね？だから悩んで、それで転んで、こんな街に……。本当に、ごめんなさい。

主観的に見ても客観的に見ても、わたしの行いは有難迷惑でした。結局わたしは、自分で思う優しさが全部裏目に出してしまう、バカな人間なんです。

こんな自分に、本当に辟易していました。死のうと思ったことだって、数え切れないほどあります。

でも、だから、決めたんです。この街で、迷い込んだ人を導こうって。ちゃんと心を読んで、過去を知って、最善の受け答えができるこの力と、この街で生きていこうって、決めたんです。

だから

だから、ちゃんと、先生のこと送りますから。

戻って、またいい作品を書いて下さい。向こうでは言えませんでしたけど、本当に、先生のことを待っている人が、たくさんいますから。

何故、こんな街ができてしまったのだろう。

誰も救うことのできないこの街を、誰が作ったのだろう。
クロ・・・七海は、自分が不幸だなんて思っちゃいない。むしろ
今の自分を幸せに感じている。やっと居場所ができたと、安堵して
いる。

でも。

「違うでしょ？」

七海は目を見開いた。

「一緒に帰りましょう、でしょ？」

手を差し出す。

七海はかかとで砂を掻いた。

「やめてください」

「何で？未練、無いの？アンタのことを振った男のこと、殴ってや
ろうとか、思わないの？」

「やめて！」

腹から声を出して、叫ぶ。

「止めないよ。アンタには見て欲しいプロットがあるんだ。アンタ
の酷評が無いと、私は書けないよ」

「そんなことはありません」

「あるって言ってるだろ！」

叫ぶと、七海は体をびくつかせて驚いた。

怯えている。それは、つまり

「ありません！わたしは、わたしは！！！」

彼女の目に涙が溜まり

「・・・わたしは、あの世界にはいない人間なんです・・・」

零れ

る

前に

私は彼女を抱きしめた。

強く、強く抱きしめた。

「人に向けられる優しさを、何故自分に向けてあげないの・・・」

彼女の呼吸が伝わる。

彼女の嗚咽が聞こえてくる。

激しくなる鼓動が私を叩く。

大切な人の涙は、どうしてこんなにも胸を打つのだろう。

「自分に正直に生きてるんでしょう？なら、それでいいじゃない。私みたいにきつかけがあれば、その素晴らしさに誰かが気がついてくれる。それを教えてくれたのは、七海、あなただよ」

彼女の体は思っていたよりも小さく、細かった。

私にもう少し大人だったら

私にもう少し余裕があれば

私が彼女の半分でも優しくければ

ここまで彼女を追い詰めるようなことはなかったかも知れない。

「だから、ね？諦めないで。一緒に、帰ろう？」

私がそう言うと、七海は溜まった唾を飲み、溢れた鼻水をすすり、何度も瞬きをして涙を弾き出して、必死に呼吸を整えた。

「・・・できません」

七海の右手が私の上着の裾を掴んだ。

「この力が使える理由は、この街と同調するから。だから、この街に来た人のことがわかるんです。この街に縛られたわたしには、この街を捨てることなんてできません」

それは、決意に満ちた言葉だった。

自分は今もう、この街を出る気は無い、と。

ああ、だから

私は彼女から体を離す。

また、雨が強くなったのか

今までの私なら、ここで諦めてしまっただろう。人の決意を邪魔してはいけない、と、大人しく身を引き、おめおめと送ってもらうことだったろう。

溜息を打つ。

しかし、今は違う。

昔の自分を客観的に見て、それがいかに愚かで、もったいないことだったのか、よくわかったつもりだ。

春人の勇敢さが

お婆さんの温もりが

そして、“クロ”の優しさが、私を変えたのだ。

私はもう一度七海を抱きしめた。さつきと違い、今度は頭を抱えるようにして。

「？ 何を……」

「その力、私が貰うよ」

七海が息を呑む。

「そんなこと、できませんよ……」

「やってみなきゃわからない」

「そんなことしたら、先生は……」

「帰るさ。言っただでしょ？一緒に帰るって」

「だからできませんって！」

強く祈る。

ねえ

この子の心には

ずっと雨が降っていたんです

ねえ

だから

雲の切れ間からでもいい

太陽を見つけるチャンスを与えてやってください

強く祈る。

「戻れ」

強く

「……うそ……」

強く祈る。

「戻れ、戻れ」

「先生、もうやめて。先生が帰ってくれないと、わたし、何のため

目を覚ます。

怖くてまぶたを開くことができない。

誰かの話し声が聞こえる。

いろんなことが起こり過ぎて、誰の声だったか思い出せない。

声が聞こえなくなるまで待とう。

誰もいなくなってからこっそりと起きよう。

今までのわたしなら、そうしたかも知れない。

でも、もう違う。

わたしは、生まれ変わったんだ。

まぶたを開く。

白衣を着たお医者さんと俊介が、わたしを見てびっくりした。

いくつか面倒な検査を終えたのが三日後。

わたしは無事に退院することができた。

迎えに来た、って言うてくれた俊介は、右手で由利を握っていた。

わたしは彼の頬を思いつき殴ると、呼んでおいたタクシーに飛

び乗って運転手に行き先を告げた。

「 駅までお願いします 」

運転手さんは笑顔で頷いた。

タクシーが動き出すと、運転手さんは気さくに話しかけてくれた。

「 お見舞いの帰りですか？ 」

「 いえ、今日退院なんです 」

「 へえ、とてもそうは見えませんか。すごくいい顔してますよ 」

「 ありがとうございます 」

しばらく間を置いてから、運転手さんが鼻をすすった。

「 あ、すいません。いや、気を悪くしないで下さいね？お客さんを見てたら、タベ死んじまった近所の野良猫のこと思い出しまつて

白い、綺麗な毛並みのヤツなんですけど、近所のガキどもが無理やり遊ぼうとするもんだからなかなか懐かなくて。そんなもんだから常識の無いガキが苛めてねえ。年中傷だらけだったんですけど、最後にはウチの前で丸くなってましてね。しばらく生死の境をさまざつてたらしいんですけど、どっかで決心がついちゃったんでしょ。ねえ、ふらりと逝っちゃいましたよ」

呼吸を整えながら、相槌を打つ。

「へへ、なんだか、お客さんを見てたら思い出しちゃったんですよ。なんでですかね。すいません、変なこと話しちゃって」

「きつと、幸せだったと思いますよ、その子。運転手さんみたいな人に気にかけてもらえて」

「へへ、ありがとございます」
信号が赤になった。

運転手さんは静かにブレーキを踏んで、目元を拭った。

コンビニと自販機の間、そのお店はあった。

小さなシャッターは閉じてしまっている。左右から必要以上に照らされ、眩しいのかも知れない。

シヨウケースの中はすかすかで、寂しい。日焼けした、銘柄と値段の書かれた紙と、使い古された質素な灰皿だけが置いてある。

「もうこの店は開かないよ」

後ろからいきなり声を掛けられた。振り向くと、頭の禿げかえったお爺さんがガードレールに座っていた。

「婆さんが独りで頑張ってた店なんだけどね、三日前に息を引き取ったよ。もう何年も寝たきりでねえ、何を言っても応えてくれなかったから、申し訳なくなつて逝ってしまったんだろうよ」

お爺さんの目から、大粒の涙が流れた。

「わしが店を継いでもいいんだけどね、コンビニや機械ほどは働けないし、潮時かと思つてね、店を閉じたんだよ。

・・・何より、あいつの生き甲斐だったからねえ。一緒に終われ

る方が、あいつも向こうで気兼ねなく店を開けると思ってたねえ」
お爺さんは遠い目をする

「一緒に終われるこいつを、うらやましいとさえ思うよ」
呟いて、唇を噛み締めた。

わたしはお店に手を合わせた。心の中で何度も「ありがとう」を
繰り返した。

そんなわたしに、お爺さんは震える声で

「ありがとう」

と言った。

川を凪ぐ風が、夏の訪れを伝えていた。

沿道を包むように並んだ桜並木は青々とした葉を湛え、威勢よく
空を撫でている。

防波堤に女の子が座っている。モノトーンに身を包んだその子は、
ポケットからタバコを取り出し、気を紛らわすように吸い始めた。

あの人と同じ銘柄だった。

ゆっくりと歩み寄る。

彼女の顔がはつきりと見える位置に来たとき、彼女が勢い良く振
り向いて、わたしに向かって訊いた。

「先生?!」

しかし、わたしが先生でないことを知ると、また物憂げな表情で
タバコを啜えた。

彼女の隣に腰を下ろす。

「先生つて、設楽先生?」

彼女・・・つぐみさんは自嘲気味に微笑んだ。

「知ってますよね。有名な現場だもん。」

先生はここで、ドジ踏んだアタシを助けようとして、足を滑らせ
て、頭を打って・・・」

言葉に詰まったのを、タバコを吸う事で隠蔽している。

「今も、意識不明の重態。アタシは天才作家の代わりに助かってし

まった、女子高生より天才の命のほう重いのに、って、ネットでも散々言われてます」

「それで、タバコを？」

「ぐれて、ってことですか？」

彼女は笑った。

「違います。先生が戻ってきてくれたら、一緒にタバコを吸いながら話したいな、って思ったんです」

つぐみさんは水面に視線を落とす。

「今は学校を辞めて、バイトをしながら執筆の真似事をしています。先生が帰ってきたら、書生にしてみらうつもりです。それがもし叶わなかったら、先生を越える作家になってみせます」

「・・・そう。頑張ってね」

「ありがとうございます」

「ねえ」

「はい？」

「一本、いただいてもいい？」

彼女はまた笑うと、「家に予備がありますから」と言って、まだ十本くらい入っている箱ごとわたしに渡した。

わたしは丁寧ありがとうございますと言って、立ち上がった。

それきり、振り返らず沿道を歩く。

つぐみさんからずっと離れたところで、ふと足が止まった。

タバコを一本取り出して、鼻に近づける。

懐かしくて、優しい匂いがした。

「ごめんなさい」

呟くと、涙が流れた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

涙が落ちて、箱に“新しい”染みを作る。

「ごめんなさい・・・みんな・・・ごめんなさい・・・」

箱を握る。

わたしにできるだろうか。

つぐみさんのような生き方が。

先生のような生き方が。

いや、しなくてはならない。

ううん、できる。

先生に貰った優しさを胸に、わたしは明日からも生きていく。

夏の風が、わたしの頬をそつと撫でた。

雨が降ったら

あの人のことを思おう

きつとまた

ひとりで泣いているだろうから

雨が上がったら

あの人のことを思おう

ああこれで

また笑えるんだと喜ぼう

窓の外で雨が降っている。

耳障りなだけだったそれも、今は意味合いが違う。早く止め、心のどこかで思うようになった。

気持ちや祈りで、人の心や運命が変わるなら世話は無い。

それに、落ち着いて考えれば、どうにもならないから祈るんじゃないか。せめてもの気休め、もしくは自分が許されるために。見たことも無い誰かにすがらんじじゃないか。

でも、それでもいいと思う。行為自体は鼻を摘みたくなくなるようなことだけれども、そうすることで次の段階に進めるのなら、どんどんやるべきだ。

誰かの背中を押す。

誰かに背中を押してもらおう。

誰かの悩みを聞く。

誰かに悩みを打ち明ける。

どれも簡単なことじゃない。

だからこそ、進んでその中に身を置くアンタを、私は誇りに思う。

今度こそ、きつと、雨の日に傘を持ってくる人じゃなく、一緒に

濡れてくれる人が見つかるよ

インターホンが鳴った。

ペンを置く。

「いらっしやい」

私はタバコを消して、頬を叩いてからドアへ急いだ。

#0 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

つたないところもありますが

少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

本当にありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2352c/>

涙雨

2009年3月24日09時42分発行